山形県における縄文時代中期後半の集落様相

― 山形盆地西部を中心として ―

菅　原　哲　文

1　はじめに

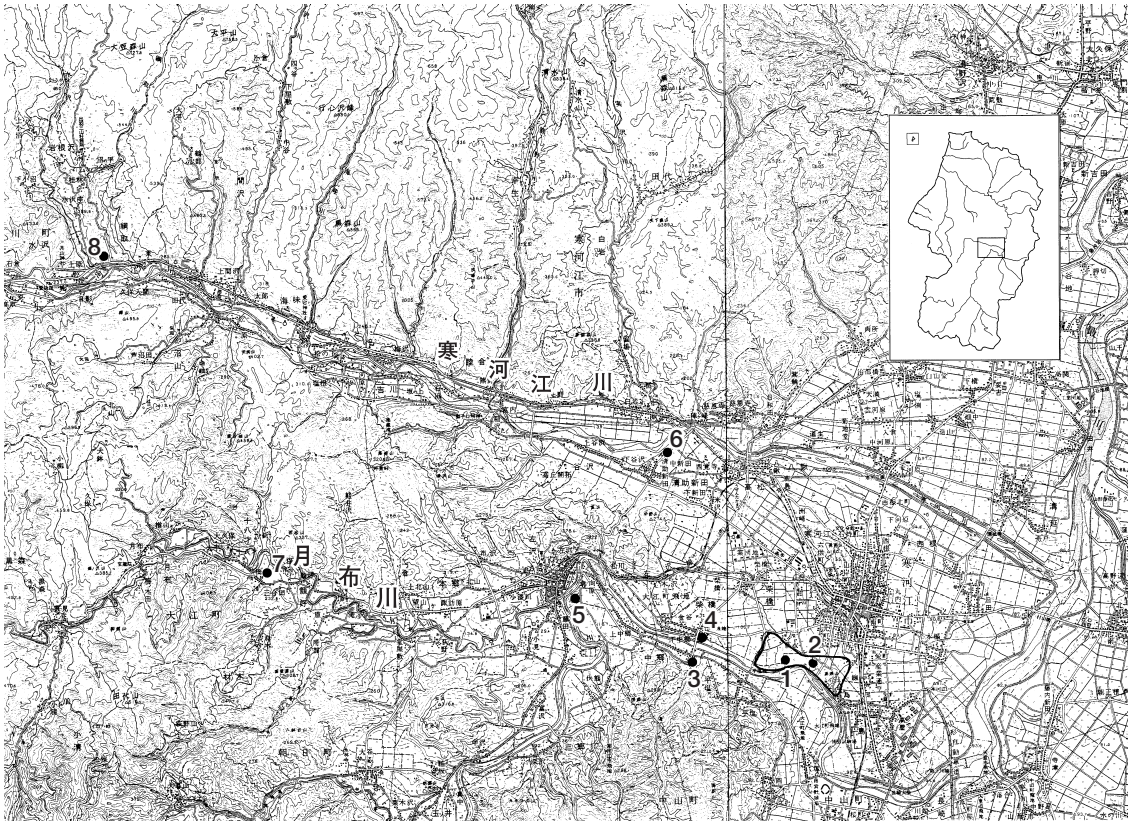
縄文時代中期の集落は、山形県村山市西海淵（さいかいぶち）遺跡に認められるような、広場を中心として、規則的に遺構群が重層して環状に配置される環状集落が典型的な様相として捉えられている側面がある。しかしながら、中期中葉の大型住居跡を中心とした大規模な環状の集落構成は、住居跡に複式炉が出現する中期後葉大木９・10式期になると姿を消し、集落構造における規則性が希薄となり、住居跡の小型化と規格化が進行するなど、環状構造や集落の構造に変化が生じることが指摘されている（小林2001）。

ここでは、県内の中期後半にかけての主な集落をとりあげ、集落の遺構群の変遷と配置、住居跡の形状と規模の変化に注目し、集落の構成パターンと変遷、集落規模との関係について検討したい。なお、県内の縄文時代中期集落の調査事例は豊富であり、県内の事例の全てを網羅して検討するのは難しいため、今回は山形盆地西部の調査例を中心として検討を行うこととした。

2　時期区分の設定

集落の変遷を検討するにあたり、住居跡や他の遺構の時期を、出土土器の型式をもとに決定する手続きが必要である。特に、縄文時代中期後半の集落は、遺構数が多く、かつ遺構間の重複関係も頻繁に認められるので、土器型式を細分してより細やかな集落の変遷が把握できるように努めた。

東北地方南部の中期後半の土器型式は、大木８ｂ・９・



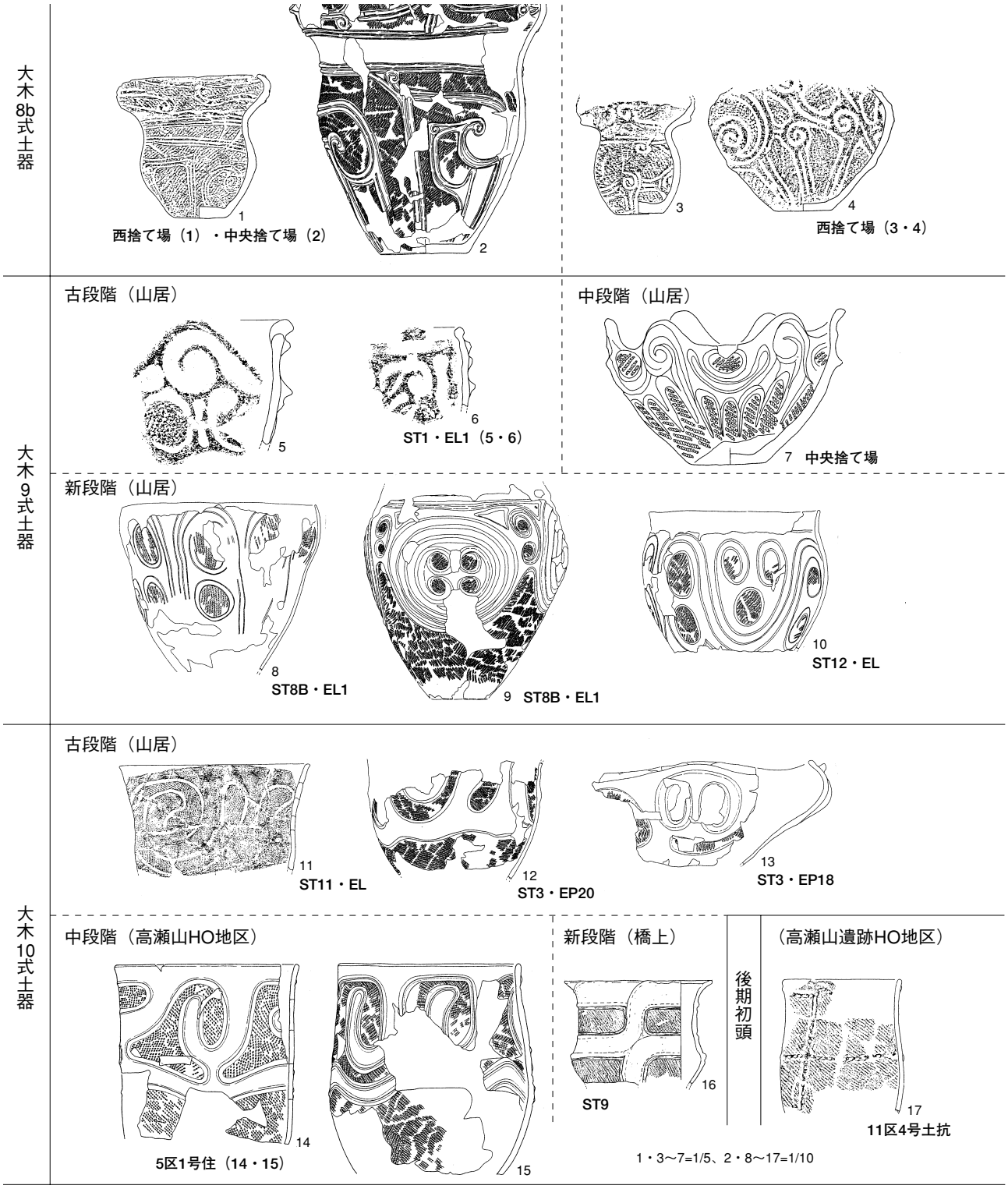
1　高瀬山遺跡（HO地区）中期集落地点　　2　高瀬山遺跡（１期）中期集落地点　　3　うぐいす沢遺跡
4　柴橋遺跡　　5　向原遺跡　　6　富沢　遺跡　　7　橋上遺跡　　8　山居遺跡

第1図　遺跡位置図（S=1：150,000）

10式土器である。各土器型式の細分であるが、大木８ｂ式は、古・新の２段階に、大木９・10式は、古・中・新の３段階に細分した[1)]（第２図）。

3　中期集落の事例検討

山形県の中央部に位置する山形盆地では、盆地西部の寒河江（さがえ）川流域や最上川流域において、高瀬山遺跡をはじめとした縄文時代の遺跡が、河岸段丘上に数多く分布している（第１図）。縄文時代中期の集落跡の調査事例も多い。ここでは、縄文時代中期後半を中心とする、最上川流域の高瀬山遺跡ＨＯ地区・ＳＡ地区、高瀬山遺跡１期地区、うぐいす沢遺跡、柴橋遺跡、寒河江川流域の山居



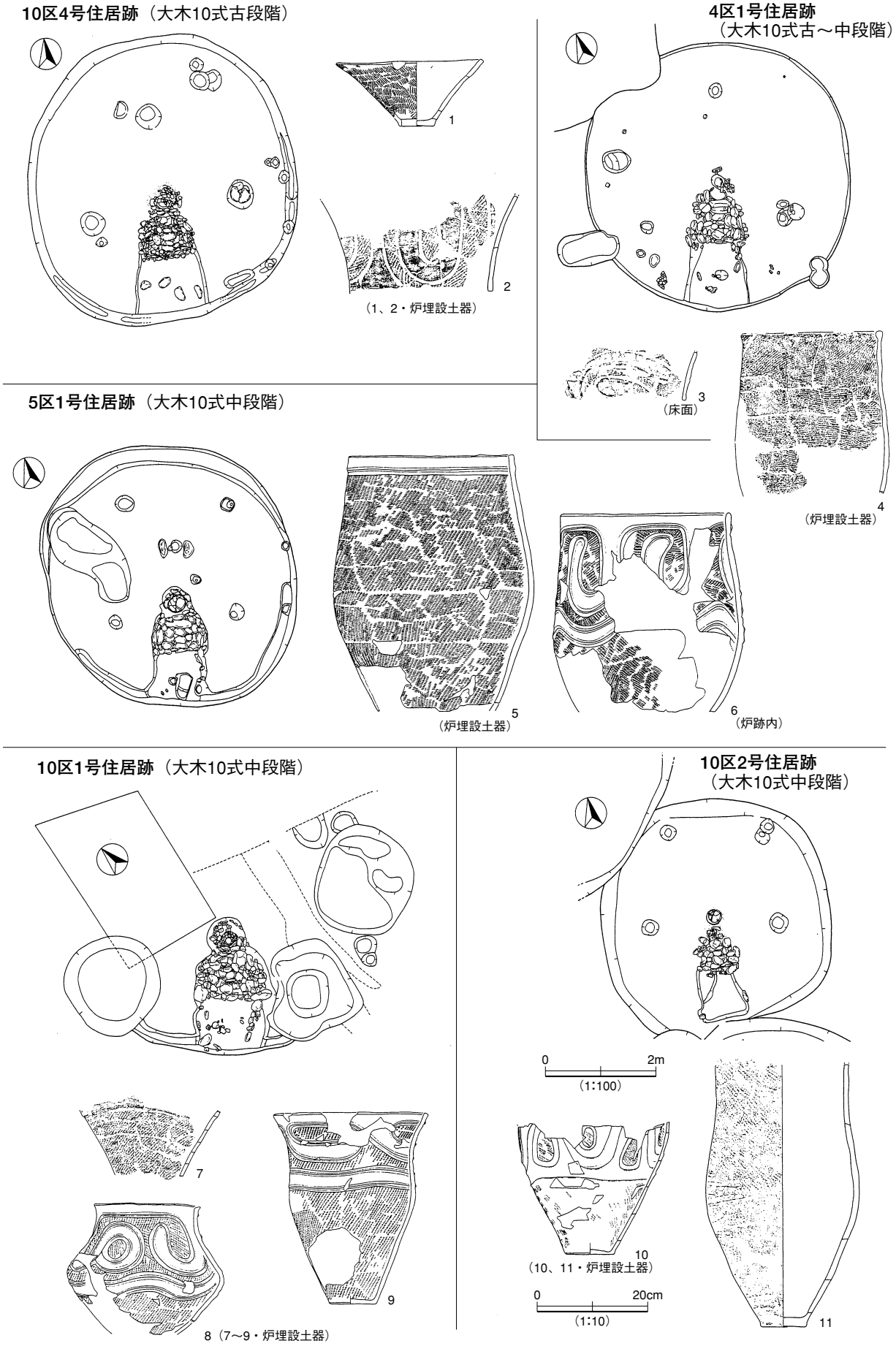
第2図　中期後半から後期初頭の土器

遺跡、最上川の支流となる月布川流域の橋上遺跡をとりあげ、集落の構成と変遷について検討をおこなうこととする。

（１）高瀬山遺跡ＨＯ地区・ＳＡ地区

高瀬山遺跡は、寒河江市街中心部から南西約２　の地点に位置し、最上川左岸の小丘陵と３～４面からなる河成段丘上に立地する。東西約1.7　、南北約0.7　、規模は約90haの広大な規模をもつ遺跡である。平成６年から平成９年の４ヵ年にわたり、山形県埋蔵文化財センターにより、東北横断自動車道建設事業にかかる約15haに及ぶ発掘調査が行われた。高瀬山遺跡１期・２期・ＳＡ地区である。また、同じく平成９年から平成13年には、最上川ふるさと公園整備事業にかかる、高瀬山遺跡ＨＯ地区の約９haの発掘調査が実施された。ＨＯ地区では、縄

第3図　高瀬山遺跡（HO地区・SA地区）遺構平面図（小林ほか2005）



第4図　高瀬山遺跡（HO地区）竪穴住居跡集成図

時代後期と晩期の、トチの実のアク抜き加工に関わる施設と考えられる木組遺構などの水場遺構が検出されたことが注目された。

中期集落は、高瀬山遺跡１期、高瀬山遺跡ＳＡ地区、高瀬山遺跡ＨＯ地区に確認された。

高瀬山遺跡ＳＡ地区では（伊藤2001）、大木10式中段階の竪穴住居跡が１棟（ＳＴ150）、土器埋設遺構が８基、大木10式期を中心とした土坑73基が検出されている。高瀬山遺跡ＨＯ地区では、中期中葉大木８ａ式期の竪穴住居跡が１棟、中期末葉大木10式期の竪穴住居跡が６棟、中期後葉（大木９･10式期）が１棟検出された。その他、大木10式期を中心とする土坑が80基以上、埋設土器３基が検出された（小林ほか2005）。両遺跡は同一の集落と考えられる（第３図）。

住居跡の時間的変遷を検討する。最も古い時期は大木８ａ式期で、10区６号住居跡の１棟だけである。平面は円形で、直径3.8mと小型であり、炉は検出されていない。

大木10式期の竪穴住居跡は、両遺跡で７棟確認されているが、複式炉の埋設土器や出土土器により構築に時期差がある。

ＨＯ地区10区４号住居跡は大木10式古段階である。４区１号住居跡は大木10式古段階もしくは中段階と考えられる。５区１号住居跡、10区１号・２号住居跡、ＳＡ地区ＳＴ150住居跡は、大木10式中段階に相当する（第４図）。土坑群は、ほとんどが大木10式中段階に帰属すると考えられる。

大木10式期の住居群は、全体として半円状に分布する状況が認められる。集落規模は、報告によれば直径120～150mとされる。段丘縁辺部にかかる部分（10区）は、住居の分布密度が高い。また、住居群の分布域に重複しつつ、その内側には土坑群が分布する。また、墓壙と考えられる土器埋設遺構の分布であるが、集落の北端にあたるＳＡ地区では、住居分布域の内側に土坑群と重複して、まとまった分布範囲をもつ。ＨＯ地区では、集落から外れた４区東端に２基が、５区の遺構分布域から西側に外れた地点に１基が分布する。また、５区１号住居跡や、土坑にまとまった遺物の廃棄が認められ、これらの遺構が機能を失った後に捨て場に転用されている。

大木10式古・中段階の竪穴住居跡の形態は、いずれも平面形が円形で、複式炉を備えている（第４図）。柱穴配置は、主柱穴が３本ないし４本構成で、規格的である。住居跡の規模は、直径が4.1～５m、面積が19.8～20.8㎡で、格差はあまり認められず類似した様相を示すと考えられる。

大木10式新段階になると、調査区内に住居跡は認められない。少数ながらも５区25号土坑などから遺物の出土が認められる。後期初頭も、この集落域に住居跡は認められず、わずかに、５区12号土坑などから当期の遺物が出土する。11区には土坑の分布が認められ、中期最終末から後期にかけては、11区に集落の主体が移動すると考えられる。

このように、高瀬山遺跡ＨＯ地区・ＳＡ地区の縄文時代中期の集落は、中期大木８ａ式や10式期に、１型式に満たない短期間に営まれた集落であり、型式１段階の同時期並存の可能性のある住居跡は、多くても４・５棟程度であると推測される。住居跡の規模は均一で、ばらつきはないように見受けられる。

高瀬山遺跡周辺の最上川の河岸段丘沿いには、大木９･10式期の集落跡が多く分布し、高瀬山遺跡ＨＯ地区･ＳＡ地区は、その中の派生的な小規模集落としての性格が想定される。

（２）高瀬山遺跡（１期）

高瀬山遺跡１期地区は、山形県埋蔵文化財センターにより、平成６～９年にかけての４次にわたる、延べ53,850㎡の発掘調査が実施された。縄文時代では、前期後葉から末葉にかけての大型住居跡を中心とした、直径120mの環状をなす集落が検出されたことが注目された（齊藤ほか2004）。

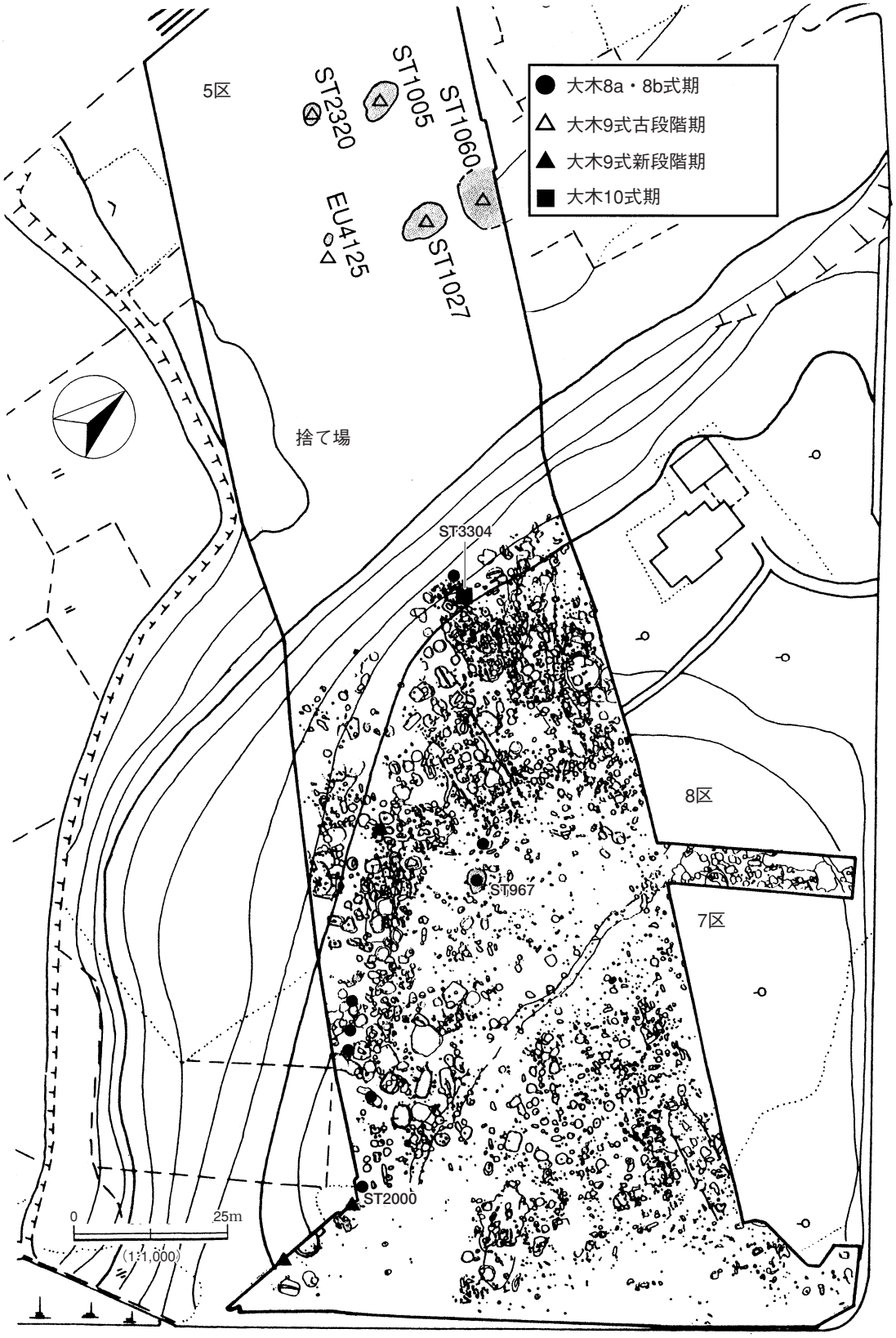
１期地区の中期の集落であるが（第５図）、ＨＯ地区の東へ約600mの地点に位置し、中期後葉を中心とした竪穴住居跡が７棟検出された。低位段丘の５区に４棟の竪穴住居跡と土器埋設遺構が、前期環状集落の分布する中位段丘でも、２棟の竪穴住居跡が検出された。時期は、大木８ａ・８ｂ・９・10式にわたる。以下時期毎の遺構の分布を述べる。

大木８ａ式期は、調査区内では中位段丘の縁辺に土坑のみが確認された。

大木８ｂ式期は、前期集落の中心近くに、竪穴住居跡が１棟（ＳＴ967）と、中位段丘の縁辺に、数基の土坑の分布が認められる。分布状況から考えると、調査区外の

中位段丘の縁辺に沿って遺構が分布すると考えられる。

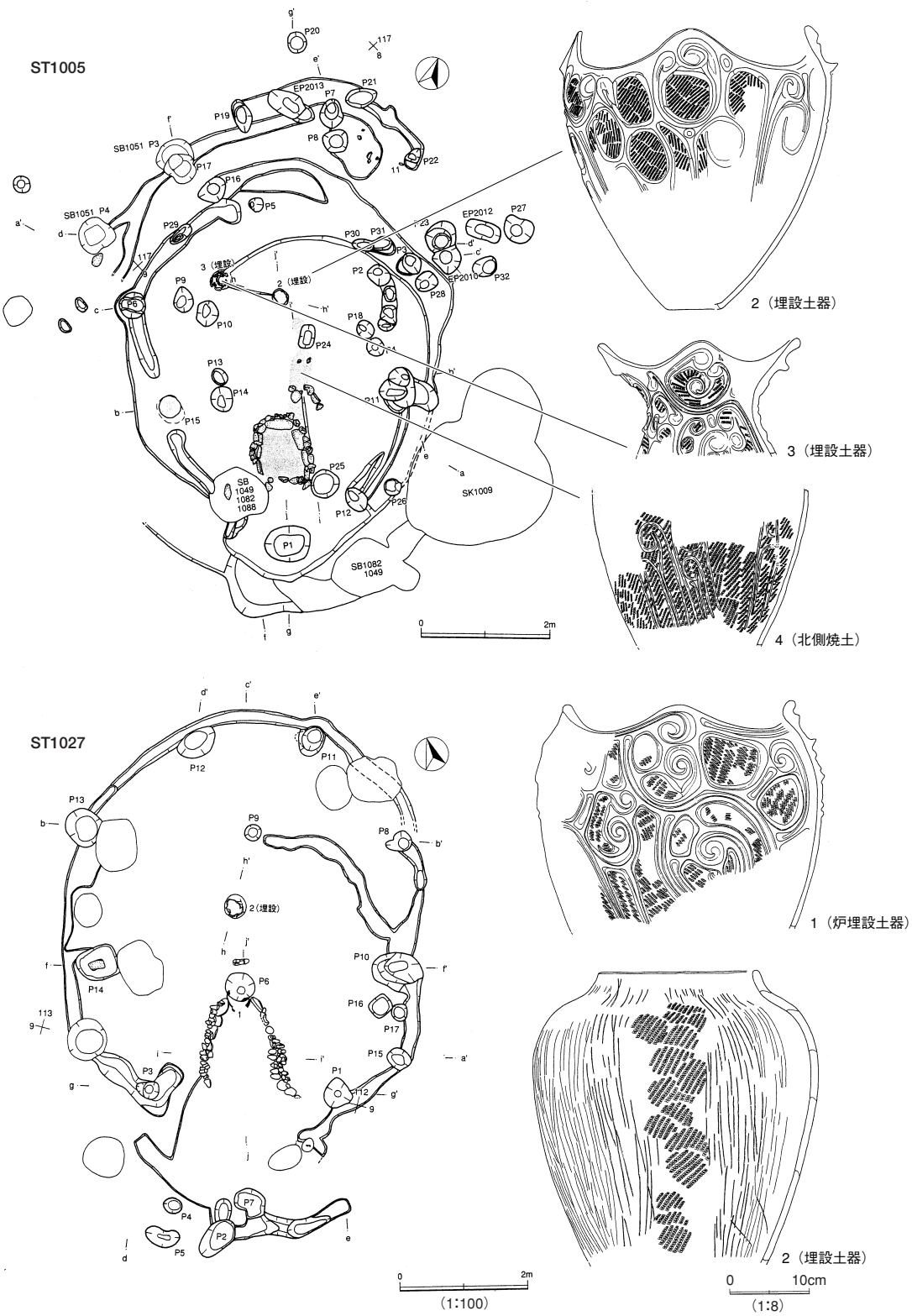
大木９式古段階期は、低位段丘面の５区に４棟の住居跡と１基の土器埋設遺構（ＥＵ4125）が分布する。当期の住居跡は、５区ＳＴ1005・ＳＴ1027・ＳＴ1060がある。またＳＴ2320は炉の形態より、同時期と考えられる。ＳＴ1005・ＳＴ1027は、平面形が楕円形を呈し、炉跡は、住居の壁側に寄った馬蹄形状の石囲炉で、住居の壁側には、前庭部と思われる張り出し部を伴っている（第６図）。



第5図　高瀬山遺跡（1期）遺構平面図

複式炉へと発展する前段階と考えられる炉跡である。また、ＳＴ1060、ＳＴ2320も平形は楕円形である。

ＳＴ1005は、北側で周溝が二重に検出され、石囲炉の他に、２ヶ所の炉跡と考えられる焼土が検出されており、建て替えもしくは拡張が考えられる。住居内に逆位に埋設された埋甕が２基検出された。ＳＴ1027も、建て替えもしくは拡張が想定され、住居の中軸線上に正位に埋設された埋甕と考えられる埋設土器を伴う。住居の規模、面積であるが、長軸の長さが４～8.3m、面積12.9～32.2㎡とばらつきが認められる。また、当期の集落は、調査



第6図　高瀬山遺跡（1期）ST1005・1027竪穴住居跡

区外の東側に広がる可能性が強い。また、集落北側の段丘の縁辺には捨て場が確認され、大木８ｂ～10式期の遺物も出土している。

７区中位段丘面に分布する１棟（ＳＴ2000）は大木９式新段階期と考えられ、複式炉を伴う。南西側の調査区外に、同時期の住居跡がさらに分布する可能性がある。

大木10式期では、中位段丘縁辺に１棟（ＳＴ3304）が分布する。調査区内では、大木10式期の土坑は検出されていない。

当遺跡では、調査区外へ集落の範囲が広がることが想定される。しかし、土坑や墓壙の分布が希薄であることより、それに伴う住居群の規模も限られると考えられる。ＨＯ・ＳＡ地区のように、数棟規模の住居跡が散在していることが想定される。調査範囲では、中期の大木８ａ式から10式などの土器型式が長期にわたって確認されてはいるものの、同地点で継続して集落を構えていたのではなく、１型式内の１段階などの短期間で、数棟単位である領域内を移動している状況が想定される。

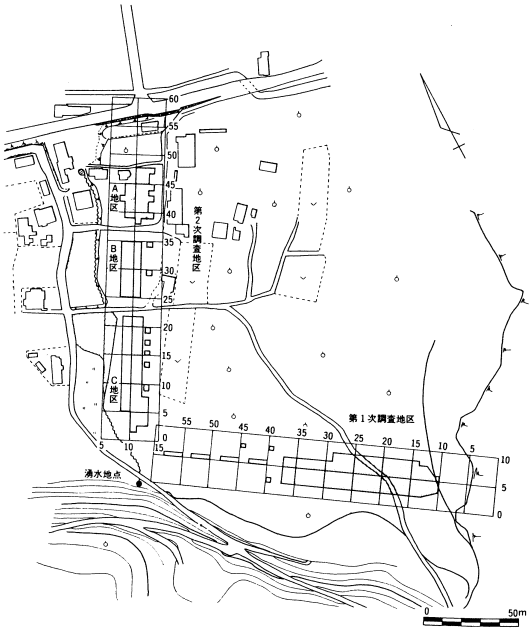
（３）寒河江市うぐいす沢遺跡

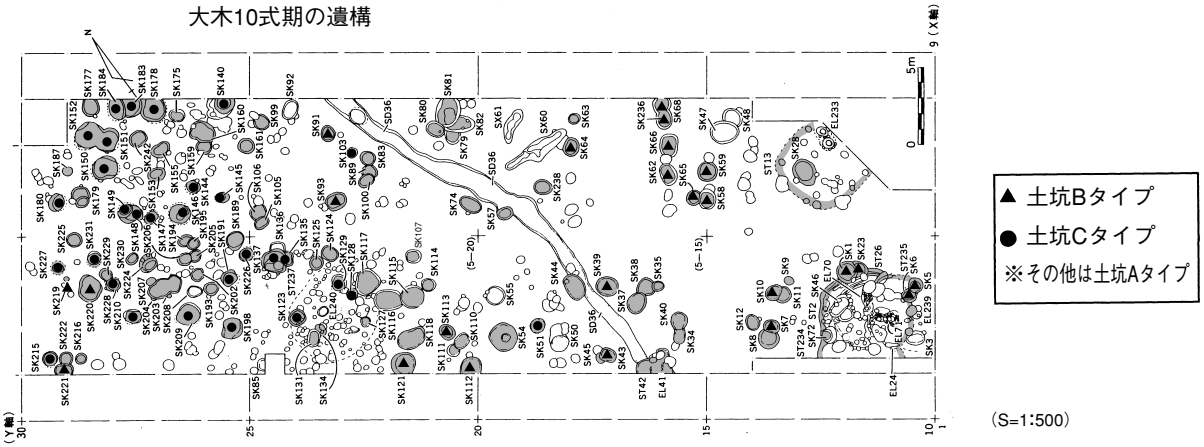
うぐいす沢遺跡は、最上川の右岸に位置し、最上川によって開折された河岸段丘の上段の微高地上に立地している。昭和55年に山形県教育委員会により第１次調査が行われ、約1,150m² について精査が実施された（佐藤・渋谷1981）。遺跡の時期は、大木８ｂ・９・10式期にかけての時期と考えられる。第１次調査で８棟の竪穴住居跡と、129基の土坑が検出されている。かなり遺構の重複が激しい（第７図）。

大木８ｂ式期は、遺物の出土のみが確認され、大木９式期では、竪穴住居跡１棟（ＳＴ237）、土坑３基と遺構数が少ないので、ここでは大木10式古・中段階の集落をとりあげる。

大木10式期の竪穴住居跡は７棟検出され、遺構の重複が激しい（第７図下段）。

当期の遺構の分布であるが、第１次調査区東側の、鶯沢川に近い地点に住居跡が分布し、西側にかけて土坑群が密集して分布する。報告書では、土坑をＡ・Ｂ・Ｃタイプに分類している。Ａタイプは断面形が皿形をなし、性格は不明とされる。Ｂタイプは、タライ形の断面形で、堆積状況（覆土にブロックが混じり、レンズ状の堆積をなす）からみて墓壙とされている。Ｃタイプは袋状の断面をなし、貯蔵用の施設（貯蔵穴）とされている。報告でも指摘されているように、調査区東側の住居群の西側





第7図　うぐいす沢遺跡調査区・第1次発掘調査区遺構平面図

に、一部重複して墓壙とされるＢタイプの土坑が分布する。また、調査区東から中央部を中心としてＡタイプの土坑が分布し、調査区西側を中心として、貯蔵穴とされるＣタイプの土坑が分布する。貯蔵穴は、大きさが直径100～120　規模の小形のものが最も多い。

集落の構成であるが、平坦地東側の縁辺に沿って住居群が分布し、住居群と一部重なりながらも西隣に墓壙群が分布し、さらに西側に貯蔵穴を中心とした土坑群が分布する、弧状の展開が想定される。土器埋設遺構は、調査区内では検出されていない。他の地点に分布域を形成している可能性がある。

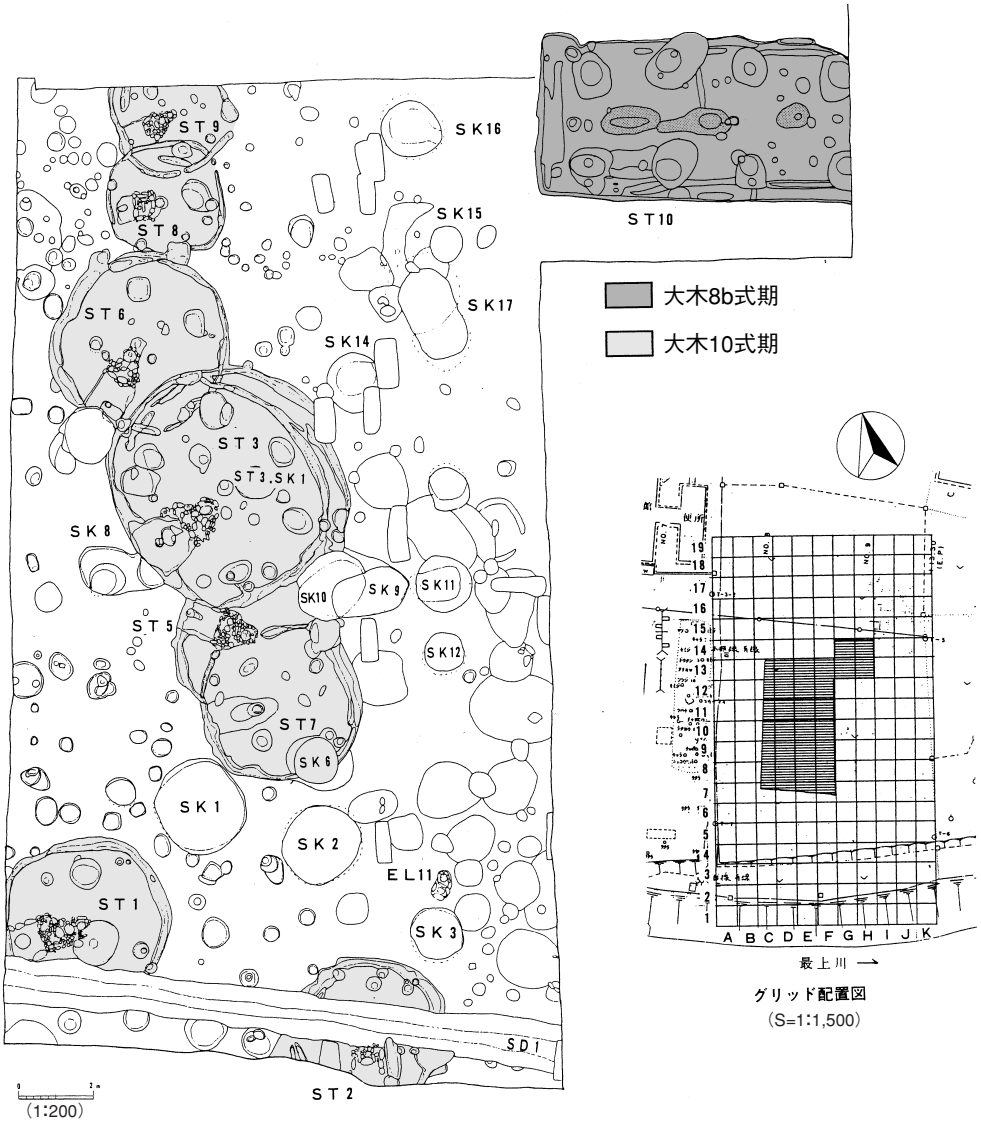
遺構や出土遺物に型式幅があること、大木10式期では土坑群が密集して分布すること、土坑墓が25基とまとまって分布する墓域が認められることより、２～３型式にわたって長期的に継続していた集落と考えられる。

（４）寒河江市柴橋遺跡

柴橋遺跡は、最上川の北岸に隣接した氾濫原面に立地する。寒河江市教育委員会により昭和62年に調査が実施され（黒田ほか1989）、縄文時代中期の10棟の竪穴住居跡や、土坑が65基検出された（第８図）。

大木８ｂ式期の遺構であるが、平面形が長方形のＳＴ10竪穴住居跡が該当する[2)]。長軸の残存長8.2m、短軸4.2mと大形で、４基の地床炉が検出されている。また、当期の土坑群も存在し、深さが３ｍに及ぶような大形土坑（ＳＫ１等）は、８ｂ式期に帰属する。

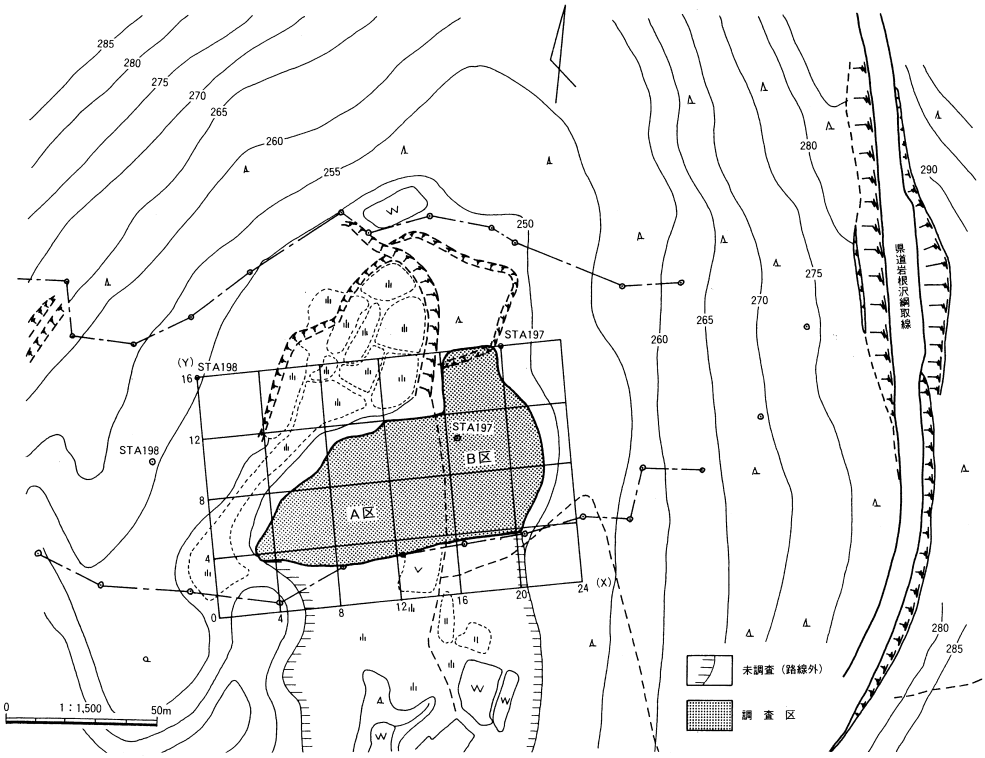
大木10式期の竪穴住居跡は９棟を占め、重複が顕著である。住居跡は全て複式炉を備える。大木10式期の細別時期は不明であるが、大木10式古・中段階が下限で、高瀬山遺跡ＨＯ地区・ＳＡ地区よりも前出の時期と考えられる。住居跡の柱穴配置は、すべて４本の主柱穴となり、

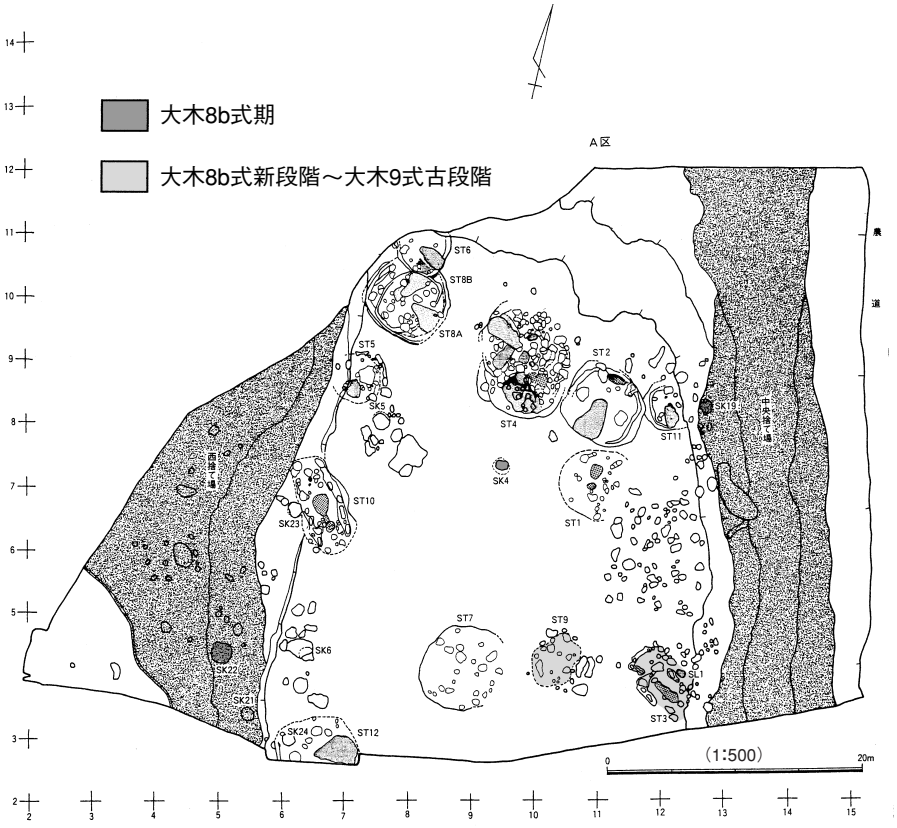


第8図　柴橋遺跡調査区・遺構平面図

かつ複式炉の前庭部に１本の補助柱穴を備える。住居跡の規模は、直径５m台が多く、最小が3.7m、最大が7.05m、住居面積は21～26㎡が主体で、最小が10.74㎡、最大が39.01㎡である。高瀬山遺跡例と比較して、住居規模は格差が認められる。遺物は、大木８ｂ式・９式の遺物が混在しているため、この時期も同じ地点に集落が継続的に営まれていたと考えられる。

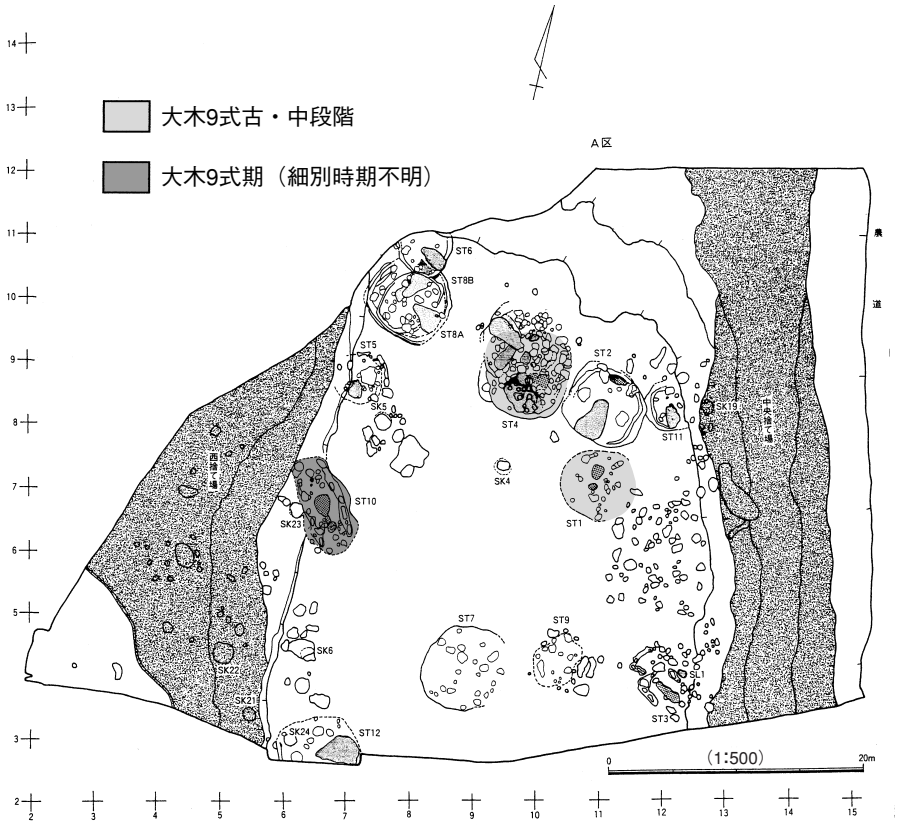
大木10式期の集落全体の様相は、住居跡の配置より、

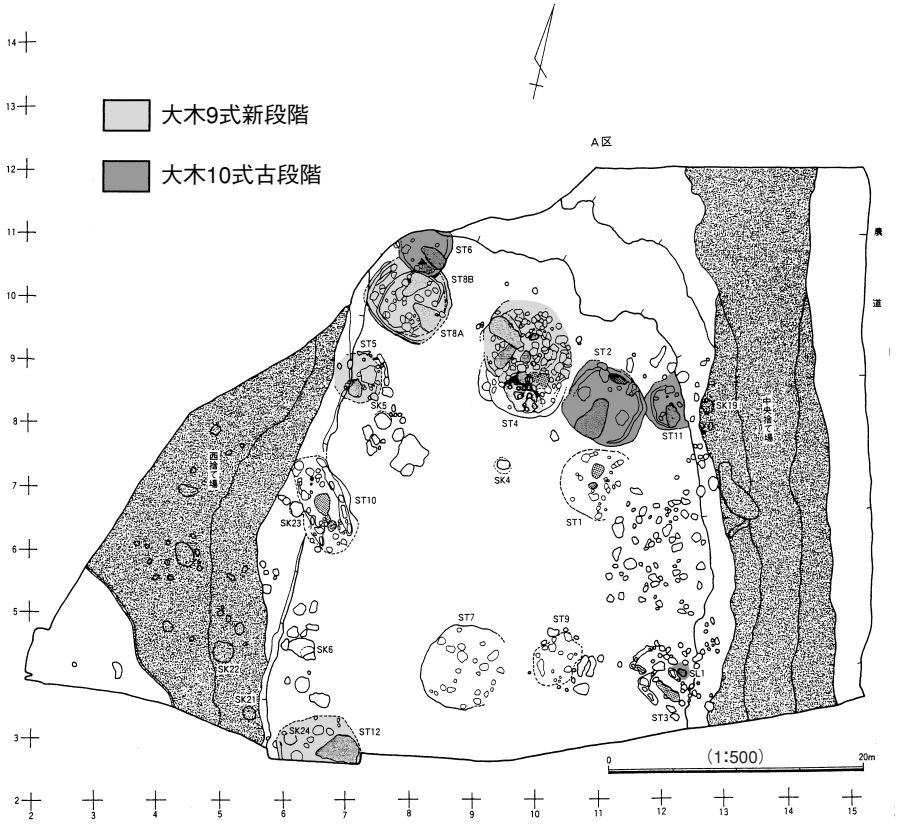




第9図　山居遺跡調査区・遺構配置図

調査区東側が中心部となる半円状もしくは環状の構成をとるものと推定される。住居群に伴う具体的な土坑は不明であるが、住居群と重複もしくは、やや内側に分布すると思われる。遺構及び出土土器が数型式に及ぶこと、





第10図　山居遺跡・遺構平面図

住居跡の重複の多いこと、土坑等の分布も密であることから、大木８ｂ式・９式・10式前半にかけての中核的な集落の可能性があると考えられる。

（５）西川町山居遺跡

山居（さんきょ）遺跡は、西川町大字水沢字山居に所在し、寒河江川の支流である、水沢川左岸の小高い丘（舌状に張り出した台地）に立地する。平成６年に山形県埋蔵文化財センターにより、5,500㎡の発掘調査が実施された（氏家・志田1998）。炉の作り替えも含めて、竪穴住居跡が22棟検出された（第９・10図）。竪穴住居跡が分布する台地の周囲には、捨て場が確認され、遺物総出土箱数は1,215箱と膨大である。出土土器による竪穴住居跡の時期区分は以下のように考えられる。

・大木８ｂ式新段階～大木９式古段階…２棟（ＳＴ３・ＳＴ９）
・大木９式古・中段階…４棟（ＳＴ１・ＳＴ４ＥＬ80・ＳＴ４ＥＬ81・ＳＴ４ＥＬ６Ｃ）
・大木９式新段階…８棟（ＳＴ４ＥＬ１Ａ・ＳＴ４ＥＬ１Ｂ・ＳＴ４ＥＬ２・ＳＴ５・ＳＴ８Ａ・ＳＴ８ＢＥＬ１・ＳＴ８ＢＥＬ２・ＳＴ12）
・大木９式期に位置づけられるが細別時期が不明…５棟（ＳＴ４ＥＬ３・ＳＴ４ＥＬ５・ＳＴ４ＥＬ６Ｂ・ＳＴ10）[3)]
・大木10式古段階…３棟、炉跡１基（ＳＴ２・ＳＴ６・ＳＴ11・ＳＬ１）

捨て場からは、前期では大木５・６式、中期では大木７ｂ式以降の土器が出土している。

大木８ａ式期の遺物は、捨て場から一定量出土する。それ以前の時期の捨て場からの出土遺物は僅かである。

大木８ｂ式新段階から大木９式古段階にかけての時期（第９図下）であるが、平面形が長方形のＳＴ３、不整方形のＳＴ９がある。炉は地床炉である。当期の遺物は、西捨て場・中央捨て場とも出土量が多い。

大木９式古・中段階（第10図上）であるが、集落に同時期に存在する可能性がある住居跡は、ＳＴ１・ＳＴ４である。ＳＴ10は、平面形が長方形をなし、大木９式期とされるが、複式炉をもたない事から、当期もしくはそれ以前の可能性も考えられる。ＳＴ４は、同じ地点に繰り返し重複して建て替えられており、特異なあり方を示している。石組部の敷石や埋設土器を伴わない初期的な複式炉が認められる。捨て場からも当期の遺物が出土する。

大木９式新段階（第10図下）は、最も検出住居跡数が多い。ＳＴ４を中心とし、ＳＴ８・ＳＴ５・ＳＴ12が並存する可能性がある。住居跡は平面形が円形で、発達した複式炉を備える定型化した形態をとる。捨て場からの遺物は少ない。

大木10式古段階（第10図下）は、ＳＴ２とＳＴ11が重複するため、並存する可能性があるのはＳＴ６・ＳＬ１を含めて３棟である。この時期の捨て場からの遺物の出土は僅かである。

以上より、型式一段階内の同時期存在の可能性がある住居跡は２～４棟で、近接した位置に建てられている。また、これらの住居跡群の集積した配置は、台地の縁辺部に位置した環状の配置として認識される。台地中央に分布するのは少ない。土坑の分布であるが、居住域とその内側に分布が重複し、12基と少ない。台地中央は遺構が希薄で、広場が想定される。

また、祭祀遺物であるが、土偶が総数55点出土した。その内、西捨て場は36点、中央捨て場は11点と、大半が捨て場からの出土である。

調査された部分は遺跡範囲の三分の一程度であり、同時期の遺構はさらに未調査部分に分布することが予測される。地形的な制約で大規模集落とは言えないが、中期中葉から後葉かけて数型式にわたって存続した中核的な集落と考えられる。

（６）大江町橋上遺跡

橋上（はしかみ）遺跡は、最上川の支流となる月布（つきぬの）川の南岸の河岸段丘に立地する。昭和59年、大江町教育委員会により、1,200㎡が調査された（高山ほか1984）。

縄文時代の住居跡は14棟検出された。その他、土器埋設遺構（約50基）や土坑群、配石遺構で構成される。

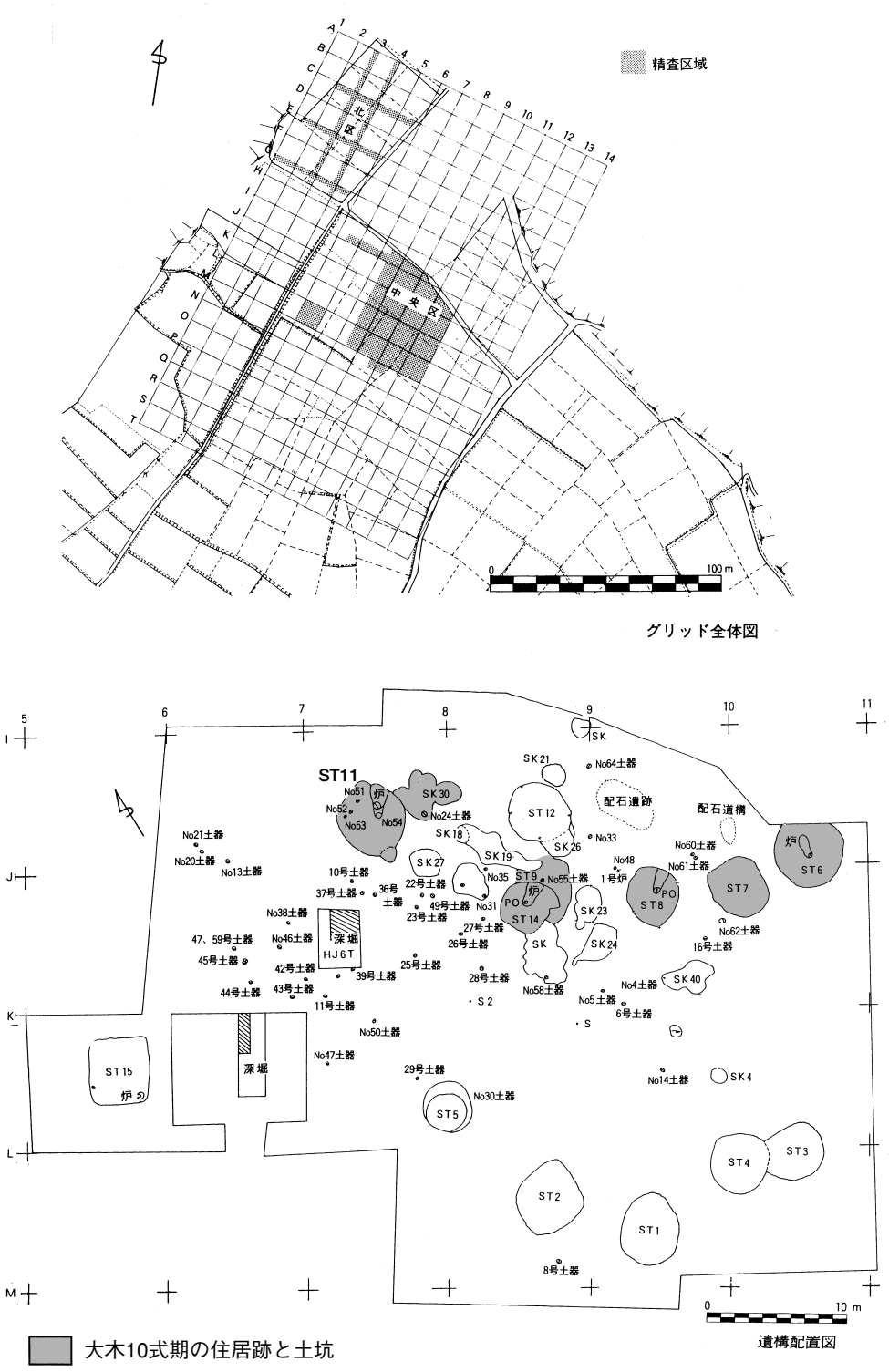
報告遺物を見る限りでは、大木10式中・新段階から、後期初頭、後期前葉まで継続しているものと考えられる。また、大木９式土器の出土も報告されている。

大木10式期の集落は（第11図）、調査区北東のエリアに住居跡が弧状に展開する。このうち、ＳＴ14は大木10式新段階に相当する。ＳＴ６は覆土中から新段階の遺物が出土した。ＳＴ９は、大木10式中段階に位置づけられると考えられる。

北区にも集落域が存在していたことが想定され、全体として、中央区から北区にかけて弧状に集落群が展開していた可能性が推定される。また、住居域よりも西側に大木10式期を中心とした埋設土器群が分布し、さらに西側は遺構の分布が希薄である。また、北区の南側の畑地48㎡を、昭和51年に大江町教育委員会が調査した結果、住居跡は検出されなかったが、縄文時代中期末から後期前葉の遺物が出土し、配石遺構が検出されている。この地点は墓域と考えられる。

後期初頭や前葉の時期では、土坑や土器埋設遺構は確認されているが、住居跡は報告されていない[4)]。

集落の性格として、母体的な性格の集落であることが



第11図　橋上遺跡調査区・遺構配置図

想定されている（宇野1994）。後期前葉を中心とした土偶などの祭祀遺物の出土、硬玉製大珠など特殊な遺物の出土、多数の埋設土器や配石遺構など大規模な墓域の形成などを考慮すれば妥当であると考えられる。また、土錘が多く出土することから、月布川を漁場とした漁撈活動（サケ漁など）も盛んに行われていたと想定され、食糧採集のための要地であったことも、集落の拠点的性格に反映されていると考えられる。

4　まとめ

各遺跡の内容を述べてきた。

当地域では、大木８ｂ式期の集落構成が明確に把握できる調査事例はない。僅かに、柴橋遺跡と山居遺跡、高瀬山遺跡（１期）に住居跡が認められる。竪穴住居跡の形態は、平面形が円形のものと、長方形を基調としたものの二者が認められ、長方形の住居跡は、大型に限らず中型のものも存在する。

大木９～10式期の集落については、その内容を十分把握することができる。また、大木９式古段階から、大木10式古・中段階にかけての様相は、基本的には同じ構成で捉えられる。

これらの集落の立地は、河川沿いの河岸段丘上、特に縁辺部にかけて住居跡が集中する傾向がある。また、中規模集落と小規模集落と分けて話を進めるが、区分については、住居跡数および遺構分布の密度を考慮することは言うまでもないが、検出された住居跡が10棟以上となること、もしくは調査範囲が限定されている場合は、大規模な捨て場の形成と土偶等のまとまった祭祀遺物の出土、数十基規模の土坑墓や埋設土器群の分布が、中規模以上の集落の条件と考えられる。

集落の構造であるが、最も外側に住居群が分布し、住居域の内側に貯蔵穴を中心とした土坑群、さらに内側やその一角に埋設土器などの墓壙群、そして集落の中央は遺構の分布が希薄なエリア、いわゆる広場が認識される。捨て場は、大規模な場合は、住居域の外側の段丘斜面や窪地に形成される。貯蔵穴や廃絶された住居跡も小規模な捨て場として転用される。柴橋遺跡・山居遺跡は、土器型式にして２～３型式にわたる継続的な中規模以上の集落と考えられる。

また、うぐいす沢遺跡も、遺構群の状況から中規模以上の集落であると考えられる。当遺跡も、全体に弧状の展開をもつ可能性があり、住居域の内側に墓壙群が、その内側に貯蔵穴を主体とした土坑群が分布し、他の遺跡と遺構配置をやや異にする。

高瀬山遺跡ＨＯ地区・ＳＡ地区は、一型式期に満たない短期間に営まれた集落で、同時期存在の住居跡は、多くても４～５棟と推測される小規模集落と考えられる。このような小規模な集落でも、やはり集落の基本的な構成は変わらない。

また、遺構変遷を検討した結果、同時並行と考えられる住居が環状の配置をとる例はなく、建て替えられた遺構の重複状況の総体がいわゆる環状の集落構成として検出されていることが認識された。

住居跡の形態の変化であるが、大木８ｂ式期に認められる平面形が長方形の住居跡は、山居遺跡の事例より、大木９式の前半頃までは残る可能性がある。また、高瀬山遺跡（１期）では、大木９式古段階の住居跡は、平面形が楕円形を呈する。中期中葉の、円形住居と長方形住居の両者存在から、複式炉を伴う円形住居へと規格化・統一化されてゆく過程での、住居形態の移行期と考えられる。ちょうどこの時期の炉跡は、石囲炉から複式炉への移行期である。炉形態の変化は、住居形態を変化させる要因の一つとして考えられるのではないか。

当地域の大木10式新段階の集落構造を判断できる遺跡は、橋上遺跡のみである。基本的には、住居群･土坑群･墓壙群・広場による環状もしくは弧状の構成をなすと考えられる。また当遺跡には、配石遺構が認められる。中期末か、後期初頭に伴うのか不明であるが、墓域を構成する新しい要素の出現と考えられる。

また、遺跡の存続傾向について補足しておく。山形盆地西部の当地域では、大木８ｂ・９・10式の前半期（古・中段階）まで継続する、もしくはその地点が断続的に利用される遺跡が中心的である。柴橋遺跡や山居遺跡、遺物の出土状況から考えてうぐいす沢遺跡なども該当しよう。

対照的に、大木10式新段階になると、前段階まで継続していた集落の多くは廃絶し、橋上遺跡など一定の規模をもつ集落は限定されてくる。また、後期初頭は、橋上遺跡、富沢Ｉ遺跡（佐藤･黒坂1996）、高瀬山遺跡など、住居跡以外の遺構や遺物の出土は認められるものの、住居

跡や集落の様相が把握できる事例は皆無に近い。

また、橋上遺跡は、後期も存続している拠点的集落と考えられるが、この遺跡の場合は、河川沿いの漁労活動等の食糧確保の要地という側面があるためであろう。

山形盆地西部の集落跡を検討したが、中期後葉の集落では、中規模以上の集落と小規模の集落が、基本的な構成においてほぼ同じ内容をもつことが明らかになった。また、長方形住居と円形住居から、円形住居への統一化という住居形態の変化は、石囲炉から複式炉へと変化する過渡期にあたり、大木９式古段階期に円形住居跡への統一がはかられると考えられる。

今後の課題であるが、当領域を検討するにあたって、中期中葉の集落様相が把握できる条件を備えた遺跡は含まれていなかった。機会をみて他地域の調査例を検討したい。

本文を作成するにあたり、石井浩幸氏からは、柴橋遺跡や橋上遺跡の調査の状況を御教示いただいた。また、小林圭一氏からは、高瀬山遺跡ＨＯ地区の縄文時代の集落についてまとめるにあたり、御教示いただいた。感謝申し上げたい。

註

1）大木９式・10式土器の細分については、以前『山形考古』で報告した編年案（菅原1999）に準じることにした。ただし、大木８ｂ式土器については、以前は古段階と新段階、新段階でも新しいものと細分していたが、ここでは以前古段階と新段階とした類型を古段階に、新段階でも新しいものとした類型を新段階とした。新段階は、渦巻文が互いに連結して区画化が進んだものである。なお、大木８ｂ式土器の編年については、まだ再検討する余地を残している。大木９式であるが、古段階は、磨消縄文が未発達で、渦巻文・楕円文などの区画文を充填する文様が中心である。中段階は、渦巻文の渦巻部がオタマジャクシ状となり、発達して半円形に張り出すものが特徴的で、磨消縄文もやや発達する。新段階では、磨消縄文が発達し、沈線文を主体とした渦巻文・楕円文・∩字文が施されるものである。大木10式土器であるが、古段階は、沈線区画で縄文を充填し、アルファベット状の文様を描くもの、中段階は、文様表現が稜線状の隆帯や隆沈線により、波濤文や雁又文状の文様を描くもの、新段階は、文様で無文部分が主体となり、玉抱文や連結S字文、方形区画文が描かれるものを基準とした。

2）遺構の時期については、調査を担当された石井浩幸氏の御教示による。

3）大木９式期で細別時期不明の、ＳＴ４ＥＬ３・ＳＴ４ＥＬ５・ＳＴ４ＥＬ６Ｂは、第10図上の、大木９式新段階のＳＴ４諸住居跡と重複するため、アミの表記を省略した。

4）石井浩幸氏の御教示では、中央区の大木10式の住居跡群の南西側に検出された、ＳＴ１～５などの住居跡は、後期初頭の時期になる可能性も考えられるという。これらの住居跡には複式炉は認められない。

図版出典

第１図：国土地理院発行１：50,000地形図「左沢・楯岡」を33％に縮小
第２図―１～13：（氏家・志田1998）、14・15・18：（小林ほか2005）、17：（高山ほか1984）
第３図：（小林ほか2005）を改変
第４図：（小林ほか2005）
第５図：（齊藤・須賀井ほか2004）を改変
第６図：（齊藤・須賀井ほか2004）
第７図：（長橋・阿部1982）を改変
第８図：（黒田ほか1989）を改変
第９・10図：（氏家・志田1998）を改変
第11図：（高山ほか1984）を改変

引用文献

伊藤邦弘2001 『高瀬山遺跡（ＳＡ）第２・３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第94集
氏家信行・志田純子1998 『山居遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
宇野修平1994 「第二章第四節　竪穴住居と集落の構造」『寒河江市史　上巻』 pp.98－110　寒河江市
黒田富善ほか1989 『柴橋遺跡発掘調査報告書』寒河江市埋蔵文化財調査報告書第７集
小林圭一2001 「山形県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』pp.109－132　縄文時代文化研究会
小林圭一ほか2005 『高瀬山遺跡（ＨＯ地区）発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第145集
齊藤主税・須賀井明子ほか2004 『高瀬山遺跡（１期）第１～４次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集
佐藤庄一1979 『山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第17集
佐藤庄一ほか1992 『山形西高敷地内遺跡第４次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第173集
佐藤庄一・黒坂雅人1996 『富沢Ｉ遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
佐藤正俊・渋谷孝雄1981 『うぐいす沢遺跡第１次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第41集
菅原哲文1999 「山形県における縄文時代中期の土器様相―中期後半の編年を中心として―」『山形考古』第６巻第３号　pp.37－55　山形考古学会
高山法彦ほか1984 『橋上遺跡発掘調査報告書』大江町埋蔵文化財発掘調査報告書第１集
長橋至・阿部明彦1982 『うぐいす沢遺跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第60集